

第2話 タントゥーペー篇

ガハハ様がやってくる!

1

お元気ですか。早いもので、もう11月ですね。昨日は、島に

種取南風が吹きました。ヤマガメオジギによると、この風が吹くと稲の実りがよくなるのだとか。植物園を管理しているヤマシシオバアも、これから珍しい花がたくさん咲くと言って喜んでいました。

先週、私は風邪をひいてしまいました。でも、ジンジャースープを飲んで体を温めたので、3日でよくなりました。

そうそう。温かいといえば、この間、心が温くなる出来事がありました。島の外から、ガハハ様という

大男がやって来たんですけどね……。

2

夜明け前に起きると、ヤマシシオバアは日課の尻フリダンスをして、日の出とともに植物園へ向かいました。植物園といっても、家の裏に広がる庭のこと。300種類もの草花が咲き誇っているので、島のみんなからヤマシシ植物園と呼ばれています。植物園に出ると、ヤマシシオバアは草花に優しく声をかけながら水をやります。

「のんびり屋さんのノビ子は大きくなっているかな? ヒネクレちゃんはまたツルがくるくるになってるわね。ティーダさんは今日も本当にすてき!」

ヤマシシオバアは栽培日記に、草花の成長とともに、その日の気温・風向・水の量を丁寧に記録していきます。

今日は、双子のヤドカリ、アーちゃんと言マンちゃんの誕生パーティーの日です。2匹が喜ぶ顔を思い浮かべながら、ヤマシシオバアは花束づくりに取りかかりました。

「アーちゃんは黄色が好きだから、ダリアとウインターコスモス。水色の好きなマンちゃんには、ノボタンとヒスイラン。……他の色の花を組み合わせてもかわいいわね」

3

その頃、誕生パーティーが始まった浜辺に、1隻の黒舟が着きました。舟から降りてきたのは、黒い服に黒いハット、黒いブーツを履いた、大男のガハハ様です。ガハハ様はガハハと笑いながら、パーティー会場に近づいていきました。

「これはこれは。オイラの歓迎会マニか? おいしそうなケーキがあるマニね〜! ひとつ食べるマニ」

ガハハ様はそう言って、パースデーケーキをムシャムシャとほおばりました。その様子を見ていたウシおばさんは悲鳴を上げました。

「モー! 何で食べちゃうのよ! 昨日の夜から一生懸命に作ったのに! モー!!」

アーちゃんとマンちゃんは、あまりのショックに泣き出してしまいました。ガハハ様は仕方ないかと肩をすくめて、テーブルに金貨を3枚置きました。

「まあまあ、そう騒がないでくれマニ。これで新しいケーキを買ったらいいマニ」

「モー! この島にケーキ屋なんてないわ! それに、金貨なんてこの島じゃ何の価値もないモー!」

「何の価値もないマニ!? そんなバカなマニ!」

ガハハ様は、ポケットから金貨をジャラジャラと出して砂浜にバラまきました。しかし、風の島のみんなはポカンとしています。「どうしたマニ? 金貨が欲しくないマニか? この島の外じゃみんな奪い合うマニよ」ガハハ様は調子が狂ってしまいました。

そこへ、花束を抱えたヤマシシオバアがやって来ました。花を目にすると、アーちゃんとマンちゃんは涙を拭いて、満面の笑みを浮かべました。金貨より花を見て喜ぶ2匹に驚いたガハハ様は、ハットを脱いで、ヤマシシオバアに頭を下げました。

「頼むマニ! オイラを弟子にしてくれマニ! この通りマニ〜!」

くらび絵本

風の島の便り

文と絵 Sava

編集 * 野原 誠吾

4

ヤマシシオバアの弟子になったガハハ様でしたが、3日もすると、尻フリダンスをサボるようになり、植物を観察するヤマシシオバアを横目にコーヒーを一服。寝坊はするし、花の名前も覚えません。挙げ句の果てには、目の見えないモグラたちに金貨を渡して、花の水やりをさせるようになりました。大目に見ていたヤマシシオバアも、ついに堪忍袋の緒が切れました。

「いいかげんにしなさい! 花たちはね、目も耳も心もあってね、愛情を注がないと応えてくれないの!」

あんた、金貨をジャラジャラ出してガハハガハ笑っているけど、それはね、心の貧しい人がすることよ!」

オイラが、貧しいマニ…!? ヘソを曲げたガハハ様は、植物園から逃げ出して、海へと向かいました。ヤマシシオバアの言葉が、トゲのように胸に刺さって

ズズスキと痛みました。おまけに、おなかがグ〜と鳴りましたが、金貨が使えないこの島で、食べ物を手に入れる方法がわかりません。

すっかり途方に暮れていると、近くから笑い声が聞こえてきました。草むらの中をのぞくと、きれいな花が飾りつけられた小さな家で、アーちゃんとマンちゃんが楽しそうに話していました。

「何だかうらやましいマニ。オイラもこんなふう誰かを喜ばせたいマニ……」

夜、ヤマシシオバアの家に帰ると、テーブルには温かいスープが用意されていました。

「どこに行ってたの? 心配したじゃないの! おなかがすいているでしょう? 遠慮しないでたくさん食べなさい」

体がポカポカ温くなるのを感じながら、ガハハ様はスープを3回もおかわりました。

5

次の日から、ガハハ様は心を入れ替えて草花の世話をするようになりました。眠たい目をこすりながら、ヤマシシオバアの隣で尻フリダンスをし、草花に水をやったら、庭の掃除にとりかかりました。植物日記には「カネチャン:キョウハ2ミリセイチョウ。ツボミガ三ツ」などと、不器用な字で花たちの成長記録をつけました。その様子を、ヤマシシオバアは横でにっこりと見守っていました。

そうして1か月がたった頃、育てていたカネノナルキに小さなピンク色の花がつけました。その日の夜、ヤマシシオバアの呼びかけで、小さなパーティーが開かれました。アーちゃんとマンちゃんもかけつけて、みんなで開花を祝いました。笑顔と拍手に囲まれて、ガハハ様の目からドツと涙があふれました。金貨を使わずに何かを成功させたのは、生まれてはじめてのことでした。

「なんだか、胸がとても温かいマニ……」

「それはね、心に花が咲いた証拠よ」

ヤマシシオバアの言葉に、ガハハ様は「ガハハハ!」と心の底から笑いしました。

風の名

種取南風 (タントゥーペー)

11月7日の文冬頃頃に吹く南風。種取南風が発芽と増進させるといわれている。

オ木木様

ガハハ様によく似た「オ木木様」という神様がいます。オ木木様は、西表島の干立という集落の「ジチ」と呼ばれる種取祭の時に現れるんだ。ジチは旧暦の10月前後、この時期に行われる。

風の言葉

やっぱり、お金で買えないものはある